川村学園女子大学研究紀要　第 26 巻　第 1 号　77 頁—91 頁　2015 年

# 大学生における不適応傾向の分析

松　井　　洋*

# An Analysis of Maladaptation of University Students

Hiroshi MATSUI


## 要　旨

大学生において，対人的な問題や学習に関わるような各種の問題が近年多く起きており，心理学の立場からもいろいろと検討されている。本研究は大学生の問題を，1. 大学生のいろいろな問題はいくつかの態度・価値観・人生観などの問題と考えられるのではないか。2. そのような，いくつかのいわば不適応傾向が具体的な問題を説明するのではないか。3. そのような不適応傾向は世界観などの背景要因で説明できるのではないか。ということの検討を目的としている。そのため東京都内，近郊大学生 230 名を対象に，「不適応傾向」，「問題行動・傾向」，「世界観と環境認知」についての質問紙調査を行った。その結果，以下のことが分かった。

1. さまざまな問題は個々ばらばらな事象ではなく，4 つの基本的な傾向もしくは認知や態度によって説明できるものである。
2. 一つ目は否定的自己観というもので，自己への自信，好意，価値が低いということで，これは幸福感が低いことの主要な原因であり，他にも大学適応，性の受容，結婚と関係が深い。そして，否定的自己観の背景には自己や社会に対する諦めがあると言える。
3. 二つ目は否定的将来像であって，自己の目標，達成，努力の欠如である。これは大学不満足や不適応の主要な原因となっている。否定的自己像はこれまで努力が報われたという実感が無く，努力は無駄で人生は切り開けないという認識を造り，それが，努力しない，目標や夢を持たない生き方を造っているようである。
4. 三つ目は引きこもり傾向であり，幸福感，結婚しない，学校に行かないということと関係がある。また，対人関係の問題が「引きこもり傾向」につながっている。
5. 四つ目はフリーター志向であり，引きこもりとは異なり対人不適応を原因としていない，仕事に後ろ向きな生き方である。ただし，幸福感や学校の問題とは関係があり，背景には親子関係をはじめとする，人に受け入れられる，人と良好であったと思える経験が足りないことがあるようだ。


キーワード：大学生，不適応，否定的自己観，否定的将来像，引きこもり傾向

*教授　社会心理学

松　井　　洋

## 問題と目的

今日，大学生の適応上の問題が少なくないと考えられる。その原因としてはいくつか考えられる。まず，大学進学率が以前より高くなったために学力や意欲や適応の面からみて，本来なら大学に入学しなかった層の学生が増加した。また，青年期の自己形成やアイデンティティ形成が以前より遅くなって，大学生の時期に青年期的問題が起きやすくなっている。さらに，現代の日本社会の状況においては，大学生が希望や安心感を持って社会人として巣立ちにくい。などの理由が考えられる。

他方，筆者はこれまで以下，および文献欄に列挙したごとく，青年期のさまざまな問題を研究してきた。それらは中高生を対象としたものも多く，内容も，国際比較研究，世代間の比較研究（松井 2000，2005，2006，松井他 2004，中里・松井他 1992，1993，1997，1999，2003，2007 島田・中里・松井 1994，1995）。そして，問題を抑止する要因としては，道徳性（松井 2003），価値観（松井 1999，2008，堀内，中里，松井 2004），愛他性（松井他 1991，1995，1997，1998）親子関係（松井 2000，2001，2002），そして，恥意識を取り上げている（堀内 2004，2005，2008，松井 1991，1997，1998，1999，2000，2001，2002，2003，2004，松井他 1995，1998，2004，2005，2006，2008 永房他 2004，中村他 2004，2008，中里他 1992，1993，1996，1997，1999，2003，2007），国際比較研究，世代間比較研究を道徳性，価値観，愛他性，親子関係，恥意識について行ってきた（島田・中里・松井 1994 松井 2008 他）。

世代を大学生に特化した研究では，大学生の不適応に影響する要因として，授業理解，友人関係，入学目的などについてその組み合わせ効果などを指摘している（松井他（1991）松井・中村・田中（2010）中村・松井・田中（2011）松井・田中・中村（2012）松井（2013）（2014））。

これらの研究を背景にして，本研究は松井（2013，2014）を継ぐものであって，大学生の諸問題を世界観というような認識の枠組みから分析しようとしている。今回の研究では特に，1. 大学生にみられる様々な問題は，いくつかの態度・価値観・人生観などの問題と整理して考えられるのではないか。2. そのような，いくつかの不適応傾向が，様々な具体的な問題を説明するのではないか。3. そのような不適応傾向は世界観などの背景要因で説明できるのではないか。

以上について検討することが本研究の目的である。

## 方　　法

1. 調査対象者

調査対象者は，東京都内，近郊大学生 230 名（女子 204 名 , 男子 26 名）。

2. 実施時期

2014 年 7 月。

3. 調査項目

調査内容は，質問項目は「不適応傾向」,「問題行動・傾向」,「世界観と環境認知」の項目 90 問である。回答は「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の 4 件法である。その他に,「この一年間で一番幸せだと感じたのはどんな時でしたか」と「あなたはどんな人生を送りたいと思いますか。夢や希望や計画などを書いてください」という 2 項目について自由記述してもらった。

## 結　　果

### 1. 不適応傾向の因子

方法で述べたように，質問項目は「不適応傾向」,「問題行動・傾向」,「世界観と環境認知」より成り立っている。そのうちまず，不適応傾向の構造について分析する。

不適応傾向に関する項目を因子分析したところ（最尤法，プロマックス回転）表 1 のような 4 因子構造になった。

第 1 因子は，自分に対する自信，好き，価値，将来，やる気，学力などについての否定的な自己認知についての項目であり「否定的自己観」と名付けた。これらの項目には，自己に関わる様々な側面があり，それらに否定的ということである。加えて，人生が明るくない，居場所がないという時間空間的な否定感にも広がる。

第 2 因子は自分の目標，将来，努力，夢，学ぶ，達成など，未来と未来を切り開く志や態度に関する項目であり，そのことに否定的という意味で「否定的将来像」と名付けた。自分の夢や将来の姿がわからない，勉強などをしても達成したという記憶がない，だから努力しようと思わないという態度である。

第 3 因子は人と接することが苦手，嫌いという人に対する不適応の項目で，と同時に部屋にいたい，趣味に没頭，オタクという自分の内にこもる傾向があるので「引きこもり傾向」と名付けた。人嫌い・人が苦手ということと，オタク，趣味，地元ということが同一因子である。つまり，自分の内にこもるということは人との不適応ということによってつくられた態度と考えられる。

第 4 因子は好みの生活スタイル，そのためにフリーター，仕事に価値を置かない，マイペースという，仕事や人生の世俗的でない独自なスタイルに関することからなり「フリーター志向」

表１　不適応傾向の因子分析

| | 因子 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | １否定的自己観 | ２否定的将来像 | ３引きこもり傾向 | ４フリーター志向 |
| 自分に自信が持てない | .843 | | | |
| 正直言って自分のことがあまり好きでない | .834 | | | |
| 孤独感を感じることがよくある | .736 | －.317 | | |
| 自分の居場所がないと感じることがある | .702 | | | |
| 自分は価値のない人間だと思うことがある | .695 | | | |
| 自分の将来が不安だ | .641 | | | |
| 自分のこれからの人生は明るいと思う　逆転 | .535 | .305 | | |
| 自分は他の人と同じくらいのことはできると思う　逆転 | .397 | | | |
| 何かでつまづくとすぐにいやになってやる気がなくなる | .368 | | | |
| 自分は基礎的な学力に欠けると思う | .363 | | | |
| 目標に向かって努力する方だ | | .752 | | |
| 自分の将来に夢がある　逆転 | | .634 | | |
| 学ぶことは楽しいと思う　逆転 | | .632 | | |
| やったというような達成感を感じることが多い　逆転 | | .536 | | |
| 自分らしさが一番大事だと思う　逆転 | | .485 | | |
| まじめにこつこつと努力することは大の苦手だ | | .481 | | |
| 将来何をしたいのかよくわからない | .314 | .479 | | |
| 何かをしようという意欲が足りない | | .470 | | |
| 自分にはいわゆる上昇志向は全くない | | .464 | | |
| 一回や二回失敗してもいくらでもやりなおせる　逆転 | | .388 | | |
| 勉強しても人生の役に立つとは思えない | | .355 | | |
| 人と接するより自分の趣味や関心に没頭していたい | | | .804 | |
| 人と接するのは気が重い | | | .655 | |
| 人づきあいが苦手だ | | | .636 | |
| 人と接することがひどくつらいと思うことがある | | | .629 | |
| 時々自分も引きこもりになるのかもしれないと思う | | | .525 | |
| 部屋にこもっていたい | | | .477 | |
| オタクっぽいと言われる | | | .474 | |
| 仕事も生活も地元で | | | .431 | |
| 好みの生活スタイル優先フリーターの方が | | | | .704 |
| 仕事つく必要ない | | | | .665 |
| 正社員いや | | | | .582 |
| 卒業後ぶらぶら | | .310 | | .552 |
| 仕事大切でない　逆転 | | | | .460 |
| 無理せずマイペースで | | | | .410 |
| 努力報われない　逆転 | | | | .344 |
| 固有値 | 8.727 | 2.186 | 1.992 | 1.158 |
| 分散の％ | 24.241 | 6.073 | 5.532 | 3.216 |
| 因子間相関第２因子 | .492 | | | |
| 因子間相関第３因子 | .610 | .437 | | |
| 因子間相関第４因子 | .263 | .219 | .454 | |

と名付けた。無理をする，努力するということへの拒否感はあるが，対人的な不適応ということは関連が認められない。これが第3因子との違いである。

「否定的自己観」と「引きこもり傾向」の間には.6程度の相関がある。また，「引きこもり傾向」と「フリーター志向」はかなり独立した因子であり，前者は人を避けたがるということが中心傾向だが，後者はそのような傾向は無いという違いがある。

## 2. 不適応傾向，問題行動・傾向，世界観と環境認知の上下群の設定

「不適応傾向」,「問題行動・傾向」,「世界観と環境認知」の諸要因間の関係の検討のために群編成を行った。

不適応傾向の各因子の因子得点を算出し，その平均値±.5$\sigma$を除外して，特徴を強調した上下の2群を分類した。

幸福感については幸福に関わる項目の因子分析により（詳細略）「自分は幸福だと思う」,「毎日の生活に満足している」,「毎日楽しい」の3項目を抽出し合計点を「幸福感」とした（$\alpha$＝.799）。

「この数年の間で一番幸せだと感じたのはどんな時でしたか」と「あなたはどんな人生を送りたいと思いますか」という質問の回答の内容，事柄を質的に分類すると以下の3分類となった。

「達成」（部活で何かをした，スポーツで勝った，入試に成功や仕事をしたいなど），

「人間関係」（部活で力を合わせ，恋人が，友と楽しい時間，家族にかこまれてや，恋愛したい，結婚したい，家族を作りたいなど），

「自己」（ライブ・音楽を楽しんだや趣味に生きる，自分らしく，平凡になど）

その他の項目は4件法の中央で傾向の上下群に分割した。

## 3.「不適応傾向」の因子と「問題行動・傾向」との関係

1）クロス集計

「不適応傾向」の4因子と「問題行動・傾向」との関係の検討のためまず両項目群間のクロス集計を行った。先述のように，不適応傾向の4因子の因子得点の平均値より±.5$\sigma$中抜きして傾向の違いのはっきりとした上下群を作った。この群と「問題行動・傾向」の諸項目とのクロス集計を行った。有意な関係は以下のとおりである。

否定的自己観が高い群は幸福感が低い群であることが多く（$\chi^2$＝33.13，p＝.000），大学満足感が弱いことが多く（$\chi^2$＝8.272，p＝.000），将来結婚しないと思う群が多い（$\chi^2$＝26.958,

p＝.000)。

否定的将来像が強い群は幸福感が弱い群であることが多く（$\chi^2$＝19.582，p＝.000），また，「幸福を感じた」のは否定的傾向が弱い群が「達成」をあげることが多く（p＝.041），「おくりたい人生」も「達成」が多い傾向があるが（p＝.059），強い群は「自分」が多い（p＝.021）。否定的将来像が強い群は大学満足が弱い群であることが多く（$\chi^2$＝9.843，p＝.002），将来結婚しないと思う群が多い（$\chi^2$＝25.886，p＝.000）。

引きこもり傾向が強い群は幸福感が弱い群であることが多く（$\chi^2$＝34.986，p＝.000），大学満足が弱い群であることが多く（$\chi^2$＝6.529，p＝.011），将来結婚しないと思う群が多い（$\chi^2$＝44.438，p＝.000）。

フリーター傾向が強い群は幸福感が弱い群であることが多く（$\chi^2$＝23.421，p＝.000），また，「幸福を感じた」のは否定的傾向が弱い群が「達成」をあげることが多く（p＝.019），「おくりたい人生」も「達成」が多い傾向がある（p＝.054）。

女（男）に生まれてよかったと思うことが少なく（$\chi^2$＝8.234，p＝.004）。将来結婚しないと思う群が多い（$\chi^2$＝10.057，p＝.002）。

2)「不適応傾向」の因子による「問題行動・傾向」の判別

「不適応傾向」の4因子によってどのような「問題行動・傾向」が説明できるのか，4因子を説明変数とし，各々の「問題行動・傾向」を従属変数とした判別分析を行った。

表2のように，合成変数の「幸福感」と単一項目の「自分は幸福」はともに70％程度の判別率で，「否定的自己観」の係数が大きく，引きこもり傾向因子がそれに次ぐ。すなわち，主観的な幸福感は自己に対する否定的な認知が主要な説明要因で，これに加えて，「引きこもり傾向」の係数が大きいように，他者との不適応があって内に引きこもろうとする傾向も幸福感の主要な説明要因となる。

「将来結婚すると思う」は「引きこもり傾向」が大きく，次いで「否定的将来像」が大きい。しかし「否定的自己観」と「フリーター志向」の係数は0に近い。人を避けようとする「引きこもり傾向」によって配偶者をも受け入れたくないという態度が作られるようである。

「女（男）にうまれてよかった」という性の受容は，幸福感と同様「否定的自己観」の係数が大きく引きこもり傾向因子がそれに次ぐ。自己に対する否定的な態度は自己の属性である性に対しても否定的な態度となる。

「大学満足」と「大学勉強満足」はどちらも「否定的将来像」の値が大きい。つまり，目標や夢，そして達成や努力の低下が大学における不適応と関係する。

他方,「学校に行きたくない」は「否定的自己観」の係数が大きく他の 3 因子の値も大きい。つまり,「学校に行きたくない」ということと大学満足感は＝ではなく，否定的な自己観に将来像，そして対人的不適応が加わって形成される可能性がある。

表 2　不適応傾向の因子による問題行動・傾向の判別分析（正準判別関数係数）

| | 幸福感 | 自分は幸福 | 将来結婚 | 女（男）にうまれてよかった | 大学満足 | 大学勉強満足 | 学校に行きたくない |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 否定的自己観 | .533 | .580 | −.020 | .580 | .457 | .205 | .492 |
| 否定的将来像 | .253 | .147 | .515 | .147 | .728 | .692 | .312 |
| 引きこもり傾向 | .415 | .392 | .920 | .392 | −.126 | .265 | .328 |
| フリーター志向 | .339 | .251 | .009 | .251 | .328 | .196 | .399 |
| （定数） | .000 | .000 | .007 | .000 | .000 | .000 | .000 |
| 交差確認済みケースのうち正しく分類された％ | 70.5% | 68.3% | 74.9% | 68.3% | 61.6% | 55.8% | 68.8% |

### 3.「不適応傾向」の因子と「世界観と環境認知」との関係

1）クロス集計

不適応傾向の規定因として考えられるものとして，自分の属する世界について基本的な特性やどういう原理で動くのかという認知，つまり世界観や，周りの社会的環境が望ましいか否か，良いか–悪いかなどの環境認知がある。

この分析のためにさまざまな世界観や環境認知の項目と「不適応傾向」4 因子とのクロス集計を行った。

「否定的自己観」が強い群は，格差があってそれが固定されていると思うと群であることが多く（$\chi^2=26.958$，$p=.000$）。高校まで学校でよいと思うことが多く（$\chi^2=11.706$，$p=.001$）。いろいろ相談できる人がいることが少なく（$\chi^2=15.196$，$p=.000$），人は結局は自分本位で冷たいと思うことが多く（$\chi^2=11.703$，$p=.000$），人生は運命や生まれつきで決まると思うことが多い（$\chi^2=24.432$，$p=.000$）。

「否定的将来像」が強い群は，いろいろ相談できる人がいないことが多い群であることが多く（$\chi^2=12.196$，$p=.000$），格差があってそれが固定されていると思うことが多く（$\chi^2=4.713$，$p=.030$）。人は結局は自分本位で冷たいと思うことが多く（$\chi^2=4.458$，$p=.035$），人生は運命や生まれつきで決まると思うことが多く（$\chi^2=12.908$，$p=.000$）。また,「幸福を感じた」の

は否定的傾向が弱い群が「達成」をあげることがより多く（p＝.041），「おくりたい人生」も「達成」（p＝.059）が多い傾向があるが，強い群は「自分」がより多い（p＝.021）。

「引きこもり傾向」が強い群は，いろいろ相談できる人がいる群であることが少なく（$\chi^2$＝12.196，p＝.000）。高校まで学校でよいと思えることはなかった群が多く（$\chi^2$＝15.040，p＝.000）。日本の将来明るくないがあてはまることが多く（$\chi^2$＝7.192，p＝.007），格差があってそれが固定されていると思うと思う傾向が多く（$\chi^2$＝4.028，p＝.045），人は結局は自分本位で冷たいと思うことが多く（$\chi^2$＝11.468，p＝.035），格差があってそれが固定されていると思うと思う傾向が多く（$\chi^2$＝4.028，p＝.045），人生は運命や生まれつきで決まると思うことが多い（$\chi^2$＝10.859，p＝.001）。

「フリーター傾向」が強い群は，高校まで学校でよいと思えることはなかったと思う群であることが多く（$\chi^2$＝10.450，p＝.001）。人は結局は自分本位で冷たいと思うことが多く（$\chi^2$＝4.221，p＝.040）。いろいろ相談できる人がいることが少なく（$\chi^2$＝6.744，p＝.009）。人生は運命や生まれつきで決まると思うことが多い（$\chi^2$＝9.355，p＝.002）。

2）世界観・環境認知の項目による不適応傾向の因子の判別分析

前項クロス集計と同じ目的で，世界観・環境認知の項目を説明変数として不適応傾向の 4 因子の各々の判別分析を行った。結果は表 3 にまとめて示した。

「否定的自己観」は「いちど落ちこぼれるともどりにくい社会」の係数が最大で，次いで「人生は生まれつきや運命で決まる」が大きく，固定的で「諦め」の世界観・人生観がこの不適応傾向の基本要因である。「日本の将来明るくない」という認識も同様である。他にも「相談できる人がいない」，「高校まで学校で良いと思えることなかった」とういう，対人的・社会的不適応観もある。

「否定的将来像」は「努力報われない」ということをはじめに「失敗やり直せない」，「人生は運生まれつき」，「チャンス多くない」という努力を否定する世界観で説明できる。

「引きこもり傾向」も第一は「努力報われない」ということだが，加えて「無理をして他人に合わせている人が多い」や，「相談できる人がいない」，「高校まで学校で良いと思えることなかった」という否定的人間観と，社会的不適応が合わさってこの傾向を判別する。

「フリーター志向」は，まず「親は大切にしてくれた」ということへの否定的態度があり，それに加えて努力と高校生活良くない，相談できる人がいないこと加わる。親をはじめとする人々からの疎外感がこの傾向の背景要因と思われる。

表３　世界観・環境認知の項目による不適応傾向の因子の判別分析（正準判別関数係数）

| 否定的自己観 | | 否定的将来像 | | 引きこもり志向 | | フリーター志向 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 落ちこぼれ戻りにくい社会 | .731 | 努力むくわれる | .868 | 努力むくわれる | −.706 | 親大切にしてくれた | .691 |
| 人生は運命生まれつき | .595 | 失敗してもやりなおせる | .424 | 合わせる人多い | .578 | 努力むくわれる | .639 |
| 相談できる人 | −.595 | 人生は運命生まれつき | −.407 | 相談できる人 | −.488 | 高校まで学校良くない | −.545 |
| 日本将来明るくない | .578 | チャンス多い | .360 | 高校まで学校良くない | .474 | 相談できる人 | .483 |
| 高校まで学校良くない | .304 | （定数） | −2.388 | 落ちこぼれ戻りにくい社会 | .446 | （定数） | −1.763 |
| （定数） | −3.990 | | | ホンネは甘え | .367 | | |
| | | | | （定数） | −1.881 | | |
| 交差確認済みのケースのうち正しく分類された％。 | 83.5% | | 76.4% | | 80.7% | | 75.2% |

## 考　　察

今日の大学生の不適応問題は，友だちとの不和，孤立など対人関係に関わる問題が多く，次いで勉学意欲低下，目標の喪失などの動機や無気力の問題が多くみられ，その結果として，不登校，引きこもり，退学などの問題も生じている。本研究では大学生に起こり得る不適応やそれに関わると思われるいろいろな行動や意識，態度について質問紙法によって調査した。

まず，それらの項目の分析から不適応傾向の構造について分析することにした。

不適応傾向に関する項目を因子分析の結果は４因子構造となった。

第１因子の「否定的自己観」は，自分に対する自信，好き，価値，将来などの否定的な自己認知についての項目群であり，これらの項目には，自己に関わる様々な側面があり否定的ということである。加えて，人生が明るくない，居場所がないという時間空間的な否定感にも広がる。大学生の問題の基本には，このような自己に否定的，非受容的という傾向があると思われる。このような態度から勉学や仕事，そして人生への意欲のなさや幸福感のなさが生まれていくと思われる。

第２因子の「否定的将来像」は，自己についての認識ではあるが，自分の目標，将来，努力，夢，達成，意欲，学びなどの，自分のこれからを創っていく，努力するという，自己の積極的未来に関する認識についての因子である。これに否定的なので自分の夢や将来の姿がわからな

い，勉強などをしても達成したという記憶がない，だから努力しようと思わないという態度である。大学生の問題傾向の一つはこの因子に現れる消極的・後ろ向きな態度であって，目標や夢を持てないこと，学習意欲に欠けることはそれぞれ独立したことでなく，一まとまりの否定的な生き方であると言える。

第３因子の「引きこもり傾向」は人と接することが苦手，嫌いと言う項目が中心で，と同時に部屋にいたい，趣味に没頭，オタクという自分の内にこもる傾向がある。つまり，対人接触が苦手という問題が中心にある。そしてそこからオタクや地元志向，そして引きこもりというので「引きこもり傾向」と名付けた。人嫌い・人が苦手ととうことと，オタク，趣味傾向という内にこもる問題は同根の問題と考えられる。また，地元志向ということからいわゆるマイルド・ヤンキーもこの傾向に近いと言えるだろう。

第４因子の「フリーター志向」は，好みの生活スタイル，仕事に価値を置かない，マイペースという，仕事や人生の世俗的でない独自なスタイルに関することからなり，「引きこもり傾向」とは異なり，対人的なトラブルから発する問題というよりは，生き方に対する独自の価値観という傾向がある。このような価値観の基にたとえば非正規の働き方につながるが，これは必ずしも不適応傾向とは言い難いだろう。因子間相関でも「引きこもり傾向」と「否定的自己観」は .61 の相関があるが,「フリーター志向」と「否定的自己観」との間は .26 の相関である。つまり,「フリーター志向」は必ずしも否定的自己観から発するものではなく，仕事をすること，職業に生きがいを持つこと，社会的地位ということにはつながらないが，一つの生き方と言い得るかもしれない。

以上の因子分析の結果から，大学生の諸問題を説明する不適応傾向は種々雑多ではなく比較的シンプルな分類が可能だと言い得る。それは，上記４因子のように自己，自己の将来，他者との関係，生き方の価値観という分類である。そしてこのような不適応傾向から，結果，現象として様々な問題行動が生まれることになる。

このような「不適応傾向」の４因子がどのような問題と関係があるのか,「問題行動・傾向」クロス集計，判別分析を行った。また，この４因子を説明する世界観・環境認知についても分析した。

否定的自己観が高い群は幸福感が低く，大学満足感が弱く，将来結婚しないと思う群が多い。判別分析でも否定的自己観は幸福感の低さ，性の非受容，学校に行きたくないという問題の第一の要因であった。主観的に幸福に生きていくためには，まず，自己認知，自分を評価し，自信を持って，好きになることが最重要であると言える。他方，否定的自己観と関係のある世界観・環境認知は「いちど落ちこぼれるともどりにくい社会」の係数が最大で，次いで「人生は

生まれつきや運命で決まる」が大きく，否定的自己観の規定要因は固定的で「諦め」の世界観・人生観が基本である。「日本の将来明るくない」という認識も同様である。他にも「相談できる人がいない」,「高校まで学校で良いと思えることなかった」とういう，対人的・社会的不適応観もある。このように，否定的自己観の背景には自己に対する諦めと，社会に対する諦めとがあると言える。そして，それが主観的幸福観の低さにつながる。

否定的将来像が強い群は幸福感が弱い群であることが多く，また,「幸福を感じた」,「おくりたい人生」についての自由回答が否定的傾向が弱い群が「達成」が多い傾向があるが，強い群は「自分」が多い。否定的将来像が強い群は大学満足が弱く，将来結婚しないと思う群が多い。判別分析の結果からは否定的将来像が強いことは大学不適応の主要な原因と言いうる。つまり，達成の経験や喜びが薄い，努力の成果を実感したことの少ない大学生が，大学だけでなく，人生のいろいろな側面における目標や勉強や努力という前向きな動機の弱い生き方を造り，さまざまな不適応傾向の原因となっている。他方，否定的将来像は「努力報われない」ということをはじめに「失敗やり直せない」,「人生は運生まれつき」,「チャンス多くない」という努力を否定する世界観で説明できる。否定的自己像は過去に達成や努力が実った，報われたという認識や経験の欠如にあり，これまで努力が報われたという実感が無く，努力は無駄で人生は切り開けないという認識を造り，それが，努力しない，目標や夢を持たない生き方を造っているようである。

大学満足はこの否定的将来像によってよく説明される。つまり，基本的にそもそも学習や達成の意欲の欠如した学生であったという問題である。しかし「学校に行きたくない」≠大学満足であって,「学校に行きたくない」は否定的な自己観に将来像，そして対人的不適応が加わって形成される可能性がある。つまり，大学に満足でも行きたくないということも有り得るということになる。

引きこもり傾向が強いと，幸福感が弱く，大学満足が弱く，将来結婚しないと思う傾向がある。この対人的不適応感のある傾向は，低い幸福感や結婚や性受容の低さや学校に行きたくない気持ちの原因にもなっている。引きこもり傾向も背景となる世界観は「努力報われない」ということだが，加えて「無理をして他人に合わせている人が多い」や,「相談できる人がいない」,「高校まで学校で良いと思えることなかった」という否定的人間観と，社会的不適応が合わさっている。このように対人関係の問題が人や社会に対する否定的な世界観を作り，それが「引きこもり志向」につながっている。

フリーター志向が強いと幸福感が弱く，また,「幸福を感じた」,「おくりたい人生」の自由回答は弱い群が「達成」をあげることが多いが，強いとこれが少ない。女（男）に生まれてよ

かったと思うことが少なく，将来結婚しないと思う群が多い。また，学校に行きたくないということにつながっている。この背景には，努力は報われないという価値観があるが，親に大切にされなかった，高校で良いことが無かった，相談する人がいないというこれまで社会的に満足できなかったということがあるようだ。つまり，引きこもり傾向のような明らかな対人的恐怖・忌避感という問題があるわけではないが，阻害感，孤立感という人から一歩離れた，引いた態度が背景となっているようである。

以上のように大学生の不適応傾向を中心に分析してきたが，結果をまとめると

1. さまざまな問題は個々ばらばらな事象ではなく，いくつかの，本研究では4つの基本的な不適応傾向もしくは認知や態度によって説明できるものである。
2, 一つ目は否定的自己観というもので，自己への自信，好意，価値が低いということで，これは幸福感の主要な原因であり，他にも大学適応，性の受容，結婚への態度の問題と関係が深い。そして，否定的自己観の背景には自己に対する諦めや，社会に対する諦めがあると言える。
3. 二つ目は否定的将来像であって，自己の目標，達成，努力の欠如である。これは大学満足や適応の主要な原因となっている。否定的自己像はこれまで努力が報われたという実感が無く，努力は無駄で人生は切り開けないという認識を造り，それが，努力しない，目標や夢を持たない生き方を造っているようである。ただし，「学校に行きたくない」は否定的な自己観に将来像，そして対人的不適応が加わって形成される可能性がある。
4. 三つ目は引きこもり傾向であり，幸福感，結婚しない，学校に行かないということと関係がある。また，対人関係の問題が「引きこもり志向」につながっている。
5. 四つ目はフリーター志向であり，引きこもりとはことなり対人不適応を原因としていない，仕事に後ろ向きな生き方である。ただし，幸福感や学校の問題とは関係があり，背景には親子関係をはじめとする，人に受け入れられる，良好であったと思える経験が足りないことがあるようだ。

以上のように大学生の諸問題は4つの不適応傾向という態度によって整理できる。そして問題解決のためにはそのような基本的な傾向を変容させること，例えば成功経験によって自己や達成の意欲を創る，対人接触の経験によって人間観や社会間の歪みを改善するという方策が考えられる。

## 文　献

堀内勝夫，中里至正，松井　洋，中村　真，永房典之，鈴木公啓（2005）．恥意識の構造　日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集 97–98.

堀内勝夫・松井　洋・中村　真・中里至正（2008）　恥意識と非行的態度に関する研究（1）恥意識の構造．日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集，354–355.

松井　洋（1991）　青年期における愛他行動の発達とその規定因，川村学園女子大学研究紀要　第 2 巻 181–193 .

松井 洋（1992）　大学生の学校適応と授業態度に関する研究，川村学園女子大学研究紀要，第 3 巻 第 1 号，147–165 .

松井　洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之（1995）愛他性の構造に関する国際比較研究　日本心理学会第 59 回大会発表論文集，173.

松井　洋（1997）　愛他性に関する国際比較研究―米国，中国，韓国，トルコ，日本の中学生・高校生を対象として―川村学園女子大学研究紀要，第 8 巻 第 1 号，107–119 .

松井　洋・中里至正・石井隆之（1998）　愛他性の構造に関する国際比較研究，社会心理学研究，第 13 巻，2 号，133–142.

松井　洋（1998）　中学・高校生の思いやり意識―日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究―，Health Sciences, vol. 14, no. 2, 45–55，日本健康科学学会.

松井　洋（1998）愛他性に関する国際比較研究 II ―日本，中国，韓国，アメリカ，トルコ，キプロス，ポーランドの中学生・高校生を対象として―，川村学園女子大学研究紀要第 9 巻　第 1 号，175–186 .

松井　洋・中里至正・石井隆之（1998）　親子間の心理的距離と愛他性に関する国際比較，日本教育心理学会発表論文集，197.

松井　洋（1999）　日本の中学生・高校生の価値観に関する研究―日本，アメリカ，中国，韓国，トルコ，キプロス，ポーランドとの国際比較研究―，川村学園女子大学研究紀要第 10 巻第 1 号，131–153 .

松井　洋・中里至正・石井隆之（2000）　中学生の親子の心理的距離，日本心理学会第 64 会大会論文集，190.

松井　洋（2000）　日本の若者のどこが変なのか：中学生・高校生の国際比較から，川村学園女子大学研究紀要，第 11 巻，第 1 号，101–114.

松井　洋（2001）　日本の中学生の親子関係，川村学園女子大学研究紀要，第 12 巻，第 1 号，171–180.

松井　洋（2002）　日本の中学生の親子関係と非行的態度，川村学園女子大学研究紀要，第 13 巻，第 1 号，105–119.

松井　洋（2003）　親子関係と子どもの道徳性：日本，アメリカ，トルコの中高生の比較，川村学園女子大学研究紀要，第 14 巻，第 1 号，85–99.

松井　洋　2003　社会的迷惑行為の抑制要因と恥意識の関係　科学研究費補助金（H12-14 基盤研究（C）(2)）研究報告書　代表松井洋（共著）.

松井　洋（2004）　社会的迷惑行為に関する研究，川村学園女子大学研究紀要，第 15 巻，第 1 号，55–68.

松井　洋・中里至正・中村　真・堀内勝夫・永房典之（2004）　恥意識の行動抑制効果に関する研究（4）―社会的迷惑行為に対する恥意識と罪悪感―　日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集　522.

松井　洋（2004）　少子化とバーチャルリアリティの時代の子どもの社会性　児童心理 58（2），16–21．金子書房.

松井　洋（2004）　非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究，社会安全研究財団助成事業実績報告書，代表松井洋 21 頁.

松井　洋・中里至正・片山美由紀（2005）　非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究，季刊社会安全（57）18–25 .

松井　洋（2008）　現代若者の価値観　丸山久美子編　21 世紀の心の処方学　第 3 部 17．アートアンドブレーン.

松井　洋・中村　真・堀内勝夫・石井隆之（2005）　非行的態度の抑制要因に関する研究　川村学園女子大学研究紀要，第 16 巻，第 1 号，27–44.

松井　洋・中里至正・中村　真・堀内勝夫・永房典之・鈴木公啓（2005）　恥意識と道徳意識の関係日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集 101-102.

松井　洋（2006）　手のかからない子を望む親，児童心理 60（1）18–23.

松井　洋・中村　真・堀内勝夫・石井隆之（2006）「子ども」―比較文化研究からみた日本の子ども―　川村学園女子大学研究紀要第 17 巻第 1，51–70.

松井　洋・中村　真・堀内勝夫（2007）　恥意識に関する文化比較および世代間比較，川村学園女子大学研究紀要第 18 巻第 1 号.

松井　洋（2007）　親と子の双方から見た親子関係　日本発達心理学会第 8 回大会発表論文集ラウンドテーブル.

松井　洋・六角絵里子・中村　真・堀内勝夫・中里至正（2008）恥意識と非行的態度に関する研究（3）非行及び社会的迷惑行為と恥意識との関係　日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集 358–359.

松井　洋・中村　真・田中裕（2010）　大学生の大学適応に関する研究　川村学園女子大学研究紀要第 21 巻 1 号，121–133.

松井　洋・田中裕・中村　真（2011）　大学生の大学適応に関する研究　平成 22 年度川村学園女子大学教育研究奨励報告書　59 頁.

松井　洋・田中裕・中村　真（2012）　大学生の大学適応に関する研究 III　川村学園女子大学研究紀要第 23 巻 1 号，117–129.

松井　洋（2013）　若者の世界観と適応．川村学園女子大学研究紀要第 24 巻 1 号，107–129.

松井　洋（2014）　大学生の世界観・人生観・自己観と幸福感川村学園女子大学研究紀要，第 25 巻 1 号 85–106.

永房典之・中里至正・松井　洋・中村　真・堀内勝夫（2004）　恥意識の行動抑制効果に関する研究（2）―非行的態度との関係―日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集 524.

中村　真・中里至正・松井　洋・堀内勝男・永房典之（2004）　恥意識の行動抑制効果に関する研究（3）―親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響―　日本社会心理　学会第 45 回大会発表論文集 520.

中村　真・中里至正・松井　洋・堀内勝夫他（2005）　親子の心理的距離と恥意識の関係，日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集 99–100 .

中村　真・松井　洋・堀内勝夫・石井隆之他（2006）　親子関係と青少年の非行的態度：沖縄県の中高生に対する実態調査から，川村学園女子大学研究紀要　第 17 巻　第 1 号，101–109.

中村　真・松井　洋・堀内勝夫・石井隆之（2007）　親子関係と青少年の非行的態度 II，川村学園女子大学研究紀要 第 18 巻 第 1 号，123–140.

中村　真・松井　洋・堀内勝夫・中里至正（2008）　恥意識と非行的態度に関する研究（2）―親子関係と恥意識の形成　日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集 356–357.

中村真・松井洋・堀内勝夫他（2009） 非行的態度の抑制因に関する研究（2），川村学園女子大学研究紀要 第 20 巻 第 1 号，77–89.

中村真・松井洋・堀内勝夫他（2010） 親子関係と青少年の非行的態度（4）親子関係，恥意識，非行的態度の関連性，川村学園女子大学研究紀要 第 21 巻 第 1 号，167–177.

中村　真・松井　洋・田中　裕 （2011） 大学生の大学適応に関する研究 II ―入学目的，授業理解，友人関係でみた対象者のタイプと大学不適応との関連―川村学園女子大学研究紀要 第 22 巻 第 1 号，85–94.

中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井　洋・瀬尾直久（1992） 非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として，（財）日工組調査研究財団

中里至正・松井　洋・小林　裕（1999） 異質な日本の若者たち―非行的態度との関連で，犯罪心理学研究 37（特別号）216–219.

中里至正・松井洋他（2003） 非行抑制要因に関する社会心理学的研究，平成 15–16 年度科学研究費補助金基盤研究（c）（2）研究成果報告書 研究課題番号 1384003　代表中里至正.

Nakasato, Y. & Matstui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. International Journal of Psychology, vol.27, 562.

Nakasato, Y. & Matstui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes—A Comparison of American, Chinese, Korean, Terkish and Japanese Youths—. International Journal of Psychology, vol.28, 48.

中里至正・松井　洋（編著）（1997） 異質な日本の若者たち，ブレーン出版.

中里至正・松井　洋（1999） 日本の若者の弱点，毎日新聞社.

中里至正・松井　洋（2003） 日本の親の弱点，毎日新聞社.

中里至正・松井　洋（2007）「心のブレーキ」としての恥意識―問題ある日本の若者たち（共編著）ブレーン出版.

島田一男・松井洋他（1994） 青少年の非行的態度に関する国際比較研究　平成 5 年度私学振興財団学術研究報告書　代表島田一男.

島田一男・松井洋他（1995） 青少年の非行的態度に関する国際比較研究　平成 6 年度私学振興財団学術研究報告書　代表島田一男.